

栗栖川発電所からの送電線(栗栖線)コンクリート電柱について

はじめに

宮内地区の山字長尾の竹藪化している山中に、使用されていない鉄筋コンクリート電柱が2本残されており、電柱に取り付けられている銘板にはそれぞれに広島電気㈱のマーク、栗栖線10号、11号と昭和6年5月と記されていた。

電柱は架線の架け替えや停電事故が起こらないように更新されており、現在多くの電柱はコンクリートポールとされているので、この時代の鉄筋コンクリート電柱はほとんど残されていないのではなかろうか。

栗栖線は別のルートに移設されたが、不要になったこれらの電柱は重機の入らない山中なのでそのまま残されたものであろう。



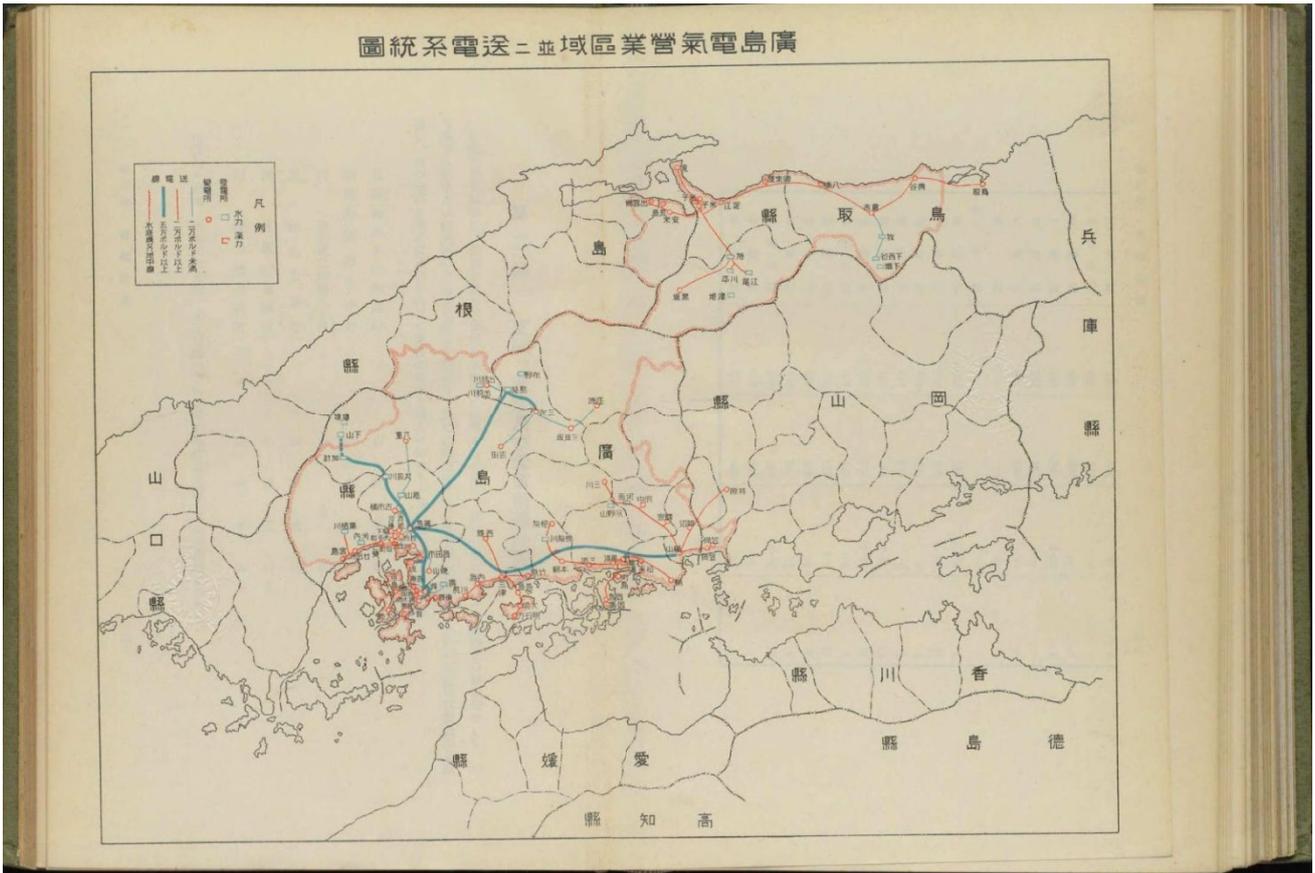
栗栖川発電所と送電線の栗栖線

佐伯地域栗栖にある栗栖川発電所は昭和6年(1931)3月に起工して翌年10月に竣工、同11月に使用認可され運転開始している。電柱銘板の昭和6年5月からみると発電所工事とともに廿日市方面への送電線栗栖線が設置されたようである。

昭和9年(1934)頃の広島電気営業区域並びに送電系統図によると栗栖川発電所より2万2千ボルトの送電線であったようで、廿日市変電所と宮島変電所をつなぐ送電線の中央付近に栗栖線は接続されているようになっている。廿日市変電所は広島電気㈱の二次変電所の中にみえないので広島瓦斯電軌㈱廿日市変電所とみられ、広島瓦斯電軌㈱の宮島線に給電していたようである。

宮内の変電所は後の時代に設置されたようであるが栗栖線との関係は定かではない。栗栖線は昭和47年(1972)3月に別系統で新設設置されている。

廣島電氣營業區域並送電系統圖



コンクリート電柱

10号電柱は地際の直径0.5m、11号電柱は地際の直径0.53mで何れの電柱も高さを計測することはできないが11号電柱は10号電柱に比べて高く電線による張力などによる電柱の倒壊や傾斜を防ぐために設けられた支線のアンカー埋設物が残されている。

10号電柱の下部はコンクリートが剥離して鉄筋が露出しており、鉄筋の腐食によりコンクリートの剥離が進行しているため大地震があったら電柱が倒壊するかもしれない。

剥離部分をみると主筋は25mm鉄筋(腐食しているため正確でない)を使用しているようで、鉄筋間隔などから約18本位使用しているものとみられ、鉄筋が重なっているところはジョイント部分とみられる。帯筋は4mm(腐食しているため正確でない)位の細いもので約20cm間隔で配筋されていたようであるが、腐食してほとんど残っていない。11号電柱は直径が大きいため主筋本数はもう少し多いものと思われる。

昭和9年(1934)ごろの広島電氣(株)営業区域内では鉄塔又は鉄柱989本、コンクリート柱194本、木柱11,801本であったようで、コンクリート電柱は重量が重いので使用本数が少ない。

昭和29年(1954)10月に遠心力鉄筋コンクリートポールのJISが制定されており、中空で軽く強度のある遠心力鉄筋コンクリートポールが普及しはじめた。架線の架け替えや電柱の更新などでコンクリートポールに置き換えられて使用本数の少なかった鉄筋コンクリート電柱は無くなっているのではなかろうか。

日本最古のコンクリート電柱は函館市末広町にある大正12年(1923)頃の角型電柱とされており現役である。昭和6年(1931)頃のこの鉄筋コンクリート電柱は市域では最古級のものとみられ、状態のよい11号電柱は廿日市の近代化遺産として保存してもらいたいものである。



引用文献など

- ・広島電気沿革史
- ・コンクリートポール・
パイル協会HP
- ・函館近代化遺産ポータル
サイト